

神話と地球物理学

寺田寅彦

青空文庫

われわれのように地球物理学関係の研究に従事しているものが国々の神話などを読む場合に一番気をつくことは、それらの説話の中にその国々の気候風土の特徴が濃厚に印銘されており浸潤していることである。たとえばスカンディナヴィアの神話の中には、温暖な国の住民には到底思いつかれそうもないような、驚くべき氷や雪の現象、あるいはそれを人格化し象徴化したと思われるような描写が織り込まれているのである。

それで、わが国の神話伝説中にも、そういう目で見ると、いかにも日本の国土にふさわしいような自然現象が記述的あるいは象徴的に至るところにちりばめられているのを発見する。

まず第一にこの国が島国であることが神代史の第一ページにおいてすでにきわめて明瞭ようりょうに表現されている。また、日本海海岸には目立たなくて太平洋岸に顕著な潮汐ちようせきの現象を表徴する記事もある。

島が生まれるという記事なども、地球物理学的に解釈すると、海底火山の噴出、あるいは地震による海底の隆起によって海中に島が現われあるいは暗礁が露出する現象、あるいはまた河口における三角州の出現などを連想させるものがある。

なかんずく はやすさのおのみこと 速須佐之男命 に関する記事の中には火山現象を如実に連想させるものがある。なほだ多い。たとえば「その泣きたもうさまは、青山を枯山からやまなす泣き枯らし、河海うみかわはことごとくに泣き乾しほき」というのは、何より適切に噴火のために草木が枯死し河海うみかわが降灰のために埋められることを連想させる。噴火を地神の慟哭どうこくと見るのは適切な譬喩ひゆであると言わなければなるまい。「すなわち天あめにまい上ります時に、山川ことごとくに動とよみ、国くに土皆震ゆりき」とあるのも、普通の地震よりもむしろ特に火山性地震を思わせる。「勝ちさびに 天照大御神あまてらすおおみかみの宮田みやたの畔離あはなち溝埋みぞうめ、また大嘗おおにえきこしめす殿くそに尿くそまり散らしき」というのも噴火による降砂降灰の災害を暗示するようにも見られる。「その服屋はたやの頂むねをうがちて、天あめの斑馬ふちこまを逆剥さかはぎに剥はぎて墮おとし入るる時にうんぬん」というのでも、火口から噴出された石塊が屋をうがって人を殺したということを示す。「すなわち高天たかまの原皆暗はらく、葦原あしはらのなかつくに中国ちゆうごくことごとくに闇くらし」というのも、噴煙降灰による天地晦冥かいめいの状を思わせる。「ここに万よろずの神おとないの声こゑは、狭蠅さばえなす皆涌わき」は火山鳴動の物すごい心持の形容にふさわしい。これらの記事を日蝕にっしょくに比べる説もあつたようであるが、日蝕にっしょくのごとき短時間の暗黒状態としては、ここに引用した以外のいろいろな記事が調和しない。神々が鏡や玉を作ったりしてあらゆる方策を講じるといふ顛末てんまつを叙した記事は、ともかく

も、相当な長い時間の経過を暗示するからである。

記紀にはないが、あめのたちからおのみこと天手力男命が、引き明けた岩戸を取って投げたのが、虚空はるかにけし飛んでそれが現在のとがくしやま戸隠山になったという話も、やはり火山爆発という現象を夢にも知らない人の国には到底成立しにくい説話である。

誤解を防ぐために一言しておかなければならないことは、ここで自分の言おうとしていることは以上の神話が全部地球物理学的現象を人格化した記述であるという意味では決してない。神々の間に起こったいろいろな事件やかつとう葛藤の描写に最もふさわしいものとしてこれらの自然現象の種々相が採用されたものと解釈するほうが穏当であろうと思われるのである。

こし やまた おろち高志の八俣の大蛇の話も火山からふき出すようがんりゅう熔岩流の光景を連想させるものである。「年としごとに来て喫くうなる」というのは、噴火の間歇性かんけつせいを暗示する。「それが目はあかがが酸漿じょうなし」とあるのは、れつか熔岩流の末端の裂罅から内部の灼熱部しゃくねつぶが隠見する状況の記述にふさわしい。「身一つにかしら頭八つ尾八つあり」は熔岩流が山の谷や沢を求めて合流あるいは分流するさまを暗示する。「またその身にこけ蘿ひすぎまた檜ひすぎ榎お生い」というのは熔岩流の表面の峨々ががたる起伏の形容とも見られなくはない。「その長さたぢやたにおやお谿八谷峽八尾をわたりて」は、そ

のままにして解釈はいらない。「その腹をみれば、ことごとくに常に血爛^{ただ}れたりとまおす」は、やはり側面の裂隙からうかがわれる内部の灼熱状態を示唆的にそう言ったものと考えられなくはない。「八つの門^{かど}」のそれぞれに「酒船^{さかぶね}を置いて」とあるのは、現在でも各地方の沢の下端によくあるような貯水池を連想させる。熔岩流がそれを目がけて沢に沿うておりて来るのは、あたかも大蛇^{だいじや}が酒甕^{さかがめ}をねらつて来るようにも見られるであろう。

八十神^{やそがみ}が大穴牟遲^{おおなむち}の神を欺いて、赤猪^{あかい}だと言つてまづかに焼けた大石を山腹に転落させる話も、やはり火山から噴出された灼熱した大石塊が急斜面を転落する光景を連想させる。

大國主^{おおくにぬしのかみ}神が海岸に立つて憂慮しておられたときに「海^{うなばらてら}を光して依り^よ来る神あり」とあるのは、あるいは電光、あるいはまたノクチルカのような夜光虫を連想させるが、また一方では、きわめてまれに日本海沿岸でも見られる北光^{オーロラ}の現象をも暗示する。

出雲風土記^{いずもふんどき}には、神様が陸地の一片を綱でもそろもそろと引き寄せる話がある。ウエーゲナーの大陸移動説では大陸と大陸、また大陸と島嶼^{とうしょ}との距離は恒^{こう}同^{どう}でなく長い年月の間にはかなり変化するものと考えられる。それで、この国叟^{くにび}きの神話でも、単に無稽^{むけい}な神仙譚^{しんせんだん}ばかりではなくて、何かしらその中に或^ある事実の胚芽^{はいが}を含んでいるかもしれないという想像を起こさせるのである。あるいはまた、二つの島の間^あの海が漸次に浅くなつ

て交通が容易になったというような事実があつて、それがこういう神話と関連していないとも限らないのである。

神話というものの意義についてはいろいろその道の学者の説があるようであるが、以上引用した若干の例によつてもわかるように、わが国の神話が地球物理学的に見てもかなりまでわが国にふさわしい真実を含んだものであるということから考えて、その他の人事的な説話の中にも、案外かなりに多くの史実あるいは史実の影像が包含されているのではないかと気がする。少なくともそういう仮定を置いた上で従来よりももう少し立ち入った神話の研究をしてもよくはないかと思うのである。

きのうの出来事に関する新聞記事がほとんどどうそばかりである場合もある。しかし数千年前からの言い伝えの中に貴重な真実が含まれている場合もあるであろう。少なくともわが国民の民族魂といったようなものの由来を研究する資料としては、万葉集などよりもさらに以上記紀の神話が重要な地位を占めるものではないかという気がする。

以上はただ一人の地球物理学者の目を通して見た日本神話観に過ぎないのであるが、ここに思うままをしるして読者の教えをこう次第である。

(昭和八年八月、文学)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第四巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年5月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年6月13日第65刷発行

※底本の誤記等を確認するにあたり、「寺田寅彦全集」（岩波書店）を参照しました。

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2000年10月3日公開

2003年10月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

神話と地球物理学

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>